

あとかき

森林や環境の問題に携わる研究者らでつくる「森林環境研究会」の、1年間の活動の集大成が年報『森林環境』だ。

今年度の『森林環境 2026』の特集は、「森や自然に夢中になれる社会をつくるためには？」と題し、なぜ人々は森林や自然、そして森林での活動に魅力を感じるのか。その根源的な問いに、理論、実践両面から向き合い、多角的に論じた。趣味やレクリエーションにとどまらず、企業活動においても森林や木材の活用が注目されている。本書が、森や自然に夢中になれる社会の実現に向けた一助になればと考えている。

「トレンド・レビュー」は、大阪・関西万博での木材活用、森林火災など時宜にかなったテーマを取り上げた。

森林文化協会の活動としては、協会が1985年から茨城県つくば市で維持管理している「つくば万博の森」が、開設から40年を迎えたことを記念して、2025年11月3日、現地で開催イベントを開催した。この森はヒノキ林の育林に加えて、遊歩道沿いや草地に里山らしい豊かな生態系が確認され、国の「自然共生サイト」に認定されている。

10月に朝日新聞朝刊に特集面「つくば万博の森 開設40年 3万本の植樹 豊かな生態系育む」を掲載した。イベントの開催告知に当初の想定を上回る応募があり、当日も四国、近畿から関東まで各地から計102人が参加した。間伐作業の見学や林業体験のほか、協会がこの森の植物、昆虫の調査を依頼している専門家の案内による、自然観察会を楽しんだ。

また、当協会は24年度から、公益事業「30by30 自然共生の森づくりプロジェクト」に取り組んでいる。森林・里山の豊かな生態系を維持するため、手入れが行き届かない森と、環境経営に意欲的な企業とをマッチングし、民間資金による森林整備を促進すると同時に、企業価値の向上を後押ししている。多くの企業、自治体、市民団体などとの調整を進め、25年度までに複数の企業と森林整備協定を締結し、さらに5、6社からの照会を受けて、マッチング作業を進めている。

巻末につくば万博の森の特集面と、企業による森林の多面的な活用の広がりを紹介した同じく特集面「森の循環サイクル 企業が一役」を収容した。

本書を通じて、当協会が理念とする「山と木と人の共生」に向けた歩みが一層進むことを願っている。

森林文化協会編集長 松村 北斗